

今年度をもって閉じる生活学科生活福祉専攻そして 永久に続く短期大学部での思い出

前副学長
生活学科生活福祉専攻教員 北 島 滋

2015年4月に32年ぶりに出戻り新参として旭川大学短期大学部に戻ってきました。最初はてっきり、1983年まで所属していた経済学部かと思いきや、短期大学部生活学科でした。この歳になると面の皮も厚くなりますので生活福祉専攻（2002年4月開科）への配属もさして驚かなかったのですが、教える内容にはかなり手こずりました。「人間の尊厳と自立」という科目を最初見た時、おーい、この大学には哲学者はいないのかい、と心の中でつぶやいたものでした。1年目を何とか乗り切りましたので、2年目からは少しずつ授業内容に新しい事柄を付け加えていくということで今日まで来ました。

私は前職を退職しても大学で教えることを続けていたので授業はそれほど苦にはなりませんでしたが、ただ非常勤ということもあり学生と直接面と向かって話し合うということはそれほど多くはありませんでしたので、本学に赴任して学生たちと話をすることで久しぶりに新鮮な気持ちになりました。

6年間、あっという間に過ぎてしまうほど楽しい教員生活でした。苦い思い出はすぐ忘れるタイプですので。生活福祉専攻の学生は本当に個性豊かな学生たちでした。私の担当する「社会の理解」の分野を得意とする学生はどちらかというと委託訓練生に多く、現役入学の学生の多くはこの分野を苦手にしていました。そのようなことを超越して学生たちとの対話は弾みました。私のゼミは別名「国境なきゼミ団」と称していましたので、2階の通りすがりに研究室があるということもあり、今の流行りの言葉でいうと3蜜を通り越して超濃密でした。いつも「断蜜さん」にしないと、と学生には言っていたのですが、ほとんど実行できませんでした。幼児教育学科、食物栄養専攻の学生の出入りもけっこうありました、今もあります。6

年間も本学でお世話になると、2020年は教え子たちの結婚ラッシュでした。メールも含めて「結婚します・しました」のあいさつに来たのは4名、子供さんが生まれた方もいました。ご結婚された一人の方は群馬にお住みなので、ひょっとしたら宇都宮に夫婦で遊びに来るかもしれませんが、いいと思います。私の世代の集まりはいつも黙禱から始まりますので。個性豊かな学生たちとの出会いで、資格は取得していませんが、社会福祉主事相当の実力はついたのではないかと自負しています。私は、生活福祉専攻で学生たちと格闘する過程で学んだことがあります。それは<傾聴>と<寄り添う>という言葉です。介護の基本的思想はこれに尽きると考えています。要介護者さんとの Social Distance（心の距離）を可能な限り近づける（距離をゼロにすることはできません、その兼ね合いが介護福祉士の熟練の技）ためには傾聴が不可欠ですから。学生さんとのお付き合いも同じですね。

教育面でも楽しい思い出が数多くあります。毎年、地域包括ケアシステムについて、学生たちとともに、旭川市、下川町、音威子府村、増毛町の調査をしました。3月の全学教育活動発表会でその成果を発表してきました。調査屋の私にとっては楽しかったのですが、学生たちは初めての経験でしたので報告書の原稿を書くのは大変だったかもしれません。私も報告書原稿の修正で毎年2月はそれでほとんど時間を費やしてきました。おかげさまで4冊の報告書を研究室から発行しました。それも楽しい思い出になっています。でも一番の思い出は、6年間に教えた学生諸氏が介護福祉分野で活躍している姿を見て旭川に来て教えた甲斐があったことだとつくづく思います。



2016年9月のオー・キャン風景

研究面でも教育面と同様、私にとってはそれなりの成果がありました。一つは、逝去した私の恩師のために、お世話になった研究者たちによる追悼論文集、庄司興吉編著『歴史認識と民主主義深化の社会学』（東信堂 2016年）を刊行したことです。私も執筆しました。私はどちらかというと比較的軽いタッチで書いたのですが、他の大物の執筆者たちが重厚な論文を出したので、後でしまったという思いを持ちましたが、後の祭りでした。

もう一つは18年前に拙稿『高田保馬』（東信堂、2002年）を刊行したのですが（売れませんが、まだ絶版にはなっていません）、書き終わってどうしても腑に落ちない点が残りに、胸の内に引っかかっていたのですが、ひょんなことから本学にも来たことのあるカンパニョーロ先生が主催するフランスの『経済哲学雑誌』の日本特集号に書かないかというお誘いを受け、よーしと苦心惨憺の末に現代の無責任の政治・思想潮流を〈腑に落ちない点〉と関わらせて論じました。もちろん私はフランス語なんてできま

せんので、ただし大昔、博士後期課程を受験するときはフランス語を選択したことはありましたが、そんなもん、〈喉元過ぎれば〉…なんてやらで、すっかり忘れてしまいました。しょうがないので静岡大に移った横田先生と共著の形にしてフランス語に翻訳していただき、査読もクリアし無事に2019年6月発行のそれに掲載していただきました。カンパニョーロ先生もいつの間にかその論文に割り込んできましたので3人の共著かもしれません。2019年12月、東大の駒場でカンパニョーロ先生を中心として特集号執筆者によるシンポジウム「経済哲学とは何か」が開かれ、私も発表に参加し楽しい時間を過ごしました。

もう一つがベストセラーを目指している？『迫りくる危機・日本型福祉国家の崩壊』（2021年2月、東信堂）です。当初は、短大紀要の55周年号に学生たちと調査したものを学生たちへのお礼にと考え、作成した報告書をベースに書こうと考えたのですが、論文にするにはやはり無理がありました。2月、3月、4月はコロナの問題もあり授業ができませんでしたので、そ

の間に構想を練り執筆にとりかかりました。素案は8月頃に出来上がったのですが、400字原稿用紙で200枚くらいになってしまいましたので、方針を転換し東信堂の社長にねじ込んでブックレット（小冊子）にしました。これまでも遺言の論文とか本とか言ってきましたが、これは正真正銘、私の〈遺言の書〉になると思います。

最後に、楽しい思い出として学生の方々に図書館サービス向上という便宜提供と諸先生・職員の皆様方には何も楽しくなかったし、かつ大変なご努力をお願いし、労力を使わせてご迷惑をおかけした教育改革です。

前者は、2016年図書館長在職時に、経済学部の横田先生、浅沼先生、木谷先生等の若手の先生方から入館者数も減少傾向にあるので図書館を改革しようという強い要望がありました。私としては〈押印ingマシン〉の方が楽だったのですが、しょうがないのでPTを立ち上げ構想・計画を練り上げました。学生の視点からのハード面の改善が主なものでした。事務室を縮小しカウンターの、パソコンの配置換えです。（株）クリエイティブ・ファニチュアさんからの旭川家具の寄贈によりそこに三浦綾子文庫を移動させ、見た目にはかなり見栄えが良くなったと思います。車椅子使用の学生目線から本、机・椅子の配置も改善しました。現在学生が利用している机の配置は、学生たちの目線から学生たち自身が配置換えしたものです。ただソフト面での図書館活用は必ずしも十分とは言えません。未だ課題にとどまっています。図書館改革は新保室長さんを中心とした職員の皆様方には新事務室、備品等の配置の設計を含めて多大なご尽力をいただきました。感謝です。またFacebook、Twitterによる図書館の情報発信も改革の成果です。でも改革のおかげで、学長は、俺の座る場所がなくなった、と愚痴っていました。改革はあくまでも学生目線からですのでご勘弁を。

後者の教育改革ですが、私は正直言って教育改革はあまり得手ではありません。得手ではありませんが、かつて学部づくりとか大学院づく

りに携わったことはありました。2017年4月に副学長を命ぜられたときに、千葉次長（現局長）から事務室で3Pをつくって、と声をかけられました。その時の私の千葉次長さんへの返事は、3Pってなーに？でした。私の教育改革の知識とレベルはそんなもんです。ともあれ道内の大学とは1、2年遅れで3Pを諸先生方のご協力で作りました。ただ本格的な教育改革のきっかけは、2018年1月でしたでしょうか、山内学長の抱持ちで全道短大学長会議（名称は不確か）に参加した時に、猪上函館短大学長の「我が短大の教育改革」のお話を聞いたことです。その時はあまり関心を持たなかったのですが、我が短期大学部の現状と比較した時、私どもの方が遅れていて、かつ主流からずれているのではという二重の意味での疑問をもったことでした。それで詳しくお話をお聞きするために同年3月に函館に行ってきました。函館さんは文部省の方針と建学の理念に沿って、猪上学長のリーダーシップの下で教育改革を進め、結果として全道の短大ではトップの補助金を獲得していました。それはそれで努力の成果として素晴らしいことだと思います。ただ私は補助金（教育推進の手段）を得るために文科省の方針にのる、それがすべてだとは必ずしも思いません。しかしそれをしないというのも、もっとどうかと思います。我が短期大学部は〈世の中の流れ（文科省の方針）〉とは関係なく、ともかく先生方は一生懸命日々の教育に邁進している。これは素晴らしいことなのですが、悪く言えば〈井の中の…〉〈猪突猛進〉になりかねない。この発言は若杉先生にいたく怒られたのですが。文科省の方針を意識して教育改革に取り組んでいけないといずれ予算等で締め付けが来る。その時になって〈武士は食わねど…〉とは言えなくなります。それで先生方に私の方から改革をお願いしました。学務委員会の豊島委員長（現副学長）はじめ委員の先生方、学務課の職員の皆様方のご努力は大変なものでした。まだこと細かな改善点は残っていますが、ほぼ文科省方針を視野に入れた短期大学部独自の教育改革になりました。それを〈酒袋〉だとすれ

ば、これまで研鑽してきた先生方の教育研究の成果を<酒>に例えれば、後は酒袋にそれを注いでいけば良いのではないかと思います。教職員の皆様方は私のような<火つけ>（教育改革提起）のおかげで消火活動（教育改革実施）に大変なご苦勞をおかけしたこと、どうかお許しください。教育改革は公立化とは関係なくやり遂げなければならぬ最も重要な案件です。その改革の一環として、入試改革についても佐藤委員長はじめ入試委員、入試広報課職員の方々に大変ご苦勞をいただきました。地域と繋がる新しい試みにも着手していただきました（青田刈りの意図を含めて）。感謝に堪えません。また就職委員会の椎名委員長（現学務委員長）の才気に富んだ運営に感謝しなければなりません。とりわけジェネリックスキルの導入ができたのは椎名就職委員長そしてそれをバックアップし

てくれた委員、キャリア職員の皆様方のおかげです。和島先生方の努力をどうやって実現するのかで悩んでいた時に、就職委員会で採用するという妙案を提起してくれたからです。こうやってお名前を挙げていくと、19人全員ということになりますが、まったくその通りです。ただただ本当にありがとうございました、という他はありません。

ともあれ、私の人生の Last Stage の6年間、教職員の皆様方のご支援・ご指導をいただき大変楽しく過ごさせていただきました。降り注ぐ太陽の下でのサッカーの応援、野球の応援、おかげでお迎えシミが増えましたが、これも6年間の楽しい思い出です。この誌面をお借りして心より御礼申し上げます。心残りは、コミ福に介護福祉士養成課程がまだ立ち上がっていないことでしょうか。